

## 平成 14 年度開講外国語科目について

報告者：福田一雄（人文学部）

### I. 英語（初級）

平成 14 年度は、「改革・英語教育」を実施に移す最初の年度となった。「新潟大学における英語教育改善のために」（大学教育開発研究センター、外国語教育改善特別検討委員会・中間報告、委員長：人文学部、金子一郎教授、平成 13 年 3 月発行、以下「中間報告」と呼ぶ）を受けて、英語学類および各学部において英語教育改革の検討が始まった。「中間報告」の主旨は、従来の英語教育「ブロック制」を廃止し、初級英語（従来の英語 IA、英語 IB）の企画・実施・運営の責任を各学部にゆだねるというものであった。従来のブロック制とは、人文学部が人・理・工、法学部が法・医・歯、経済学部が経・教・農の英語教育の責任を持つというものであった。これを廃止し、各学部の責任とそれをサポートする「協力学部制」があらたに提案された。協力学部制は、英語授業担当のいる学部が、そうした教員が皆無か、あるいは、ほとんどいない学部を補助するシステムである。

あらたな協力学部制は、人文学部が理・工の、法学部が医学部医学科および歯の、経済学部が農の、教育学部が医学部保健学科の協力学部となるシステムである。こうした実施体制の改革に関して、各学部でさまざまな意見があったが、最終的に、この改革案は大筋において全学の同意を得ることになった。「中間報告」では、「初級英語」の企画・実施責任を負う各学部において、「外国語教育委員会」を設置するよう提案している。「中間報告」のポイントの一つは、従来の「教養英語」というカテゴリーは教養部があった時代のなごりであり、今後は、「大学英語」というカテゴリーに基づいて、英語教育を 4 年間一貫の学部教育全体の中に位置付ける必要があるということである。そのような位置付けを行い、初級英語教育を企画し、実施していく母体は各学部をおいてないということである。

「中間報告」のもう一つのポイントは、英語 IA、英語 IB という名称を廃止し、教育方針と中身がより明示されたタイトルを、各学部において検討していただ

きたいというものであった。この点について、各学部で議論された結果、平成 14 年度の初級英語の名称は以下ようになった。なお開講コマ数はほぼ前年どおりである。受講定員もリーディング系で約 50 名、コミュニケーション系で約 30 名が基本となっている。

<平成 14 年度初級英語の科目名称>

- 人文学部：「英語 IA」（サブタイトル：「社会を見つめる」、「環境を生きる」、「人間を考える」、「歴史をたどる」、「科学を読む」）、「英語 IB」（サブタイトル：「聴解」、「口頭発表」、「会話」、「作文」）
- 法学部：「コミュニケーション英語」
- 経済学部：「英語 IA」、「英語 IB」
- 教育人間科学部：「エデュケーション英語」、「コミュニケーション英語」
- 理学部：「英語 IA」、「英語 IB」
- 工学部：「教養英語 A」、「教養英語 B」（人文学部と同様のサブタイトルが付く）
- 農学部：「英語 IA」、「英語 IB」
- 医学部医学科：「英語 IA」、「英語 IB」
- 医学部保健学科：「実用イギリス英語 I」、「実用イギリス英語 II」、「入門医療英語」、「口頭口語英語（二年度向け）」
- 歯学部：「リーディング英語」、「コミュニケーション英語」

科目名称に関しては、以上のように学部によって違いがある。名称だけ変わっても、内容が同じであればあまり意味がないのであるが、名は体を表すということもあり、名称はやはり重要である。今後も、学部 4 年間を通じての英語教育という視点から、さらに適切な名称を検討していただきたい。

今後も、初級英語に関しては、学部が望む英語教育を学部で企画し、協力学部の英語関係者と連絡を密にしながら実施にあたるということになる。

FD の報告の枠を越えることになるが、参考までに、

初級英語の難易度に関して、筆者が平成 14 年 7 月に新潟県内出身の新大生 81 名（一年生 58 名、二年生 23 名で、全学部にわたる）に実施したアンケートの結果を、簡単に紹介しておきたい。それによると、リーディング系の初級英語については、（1）ちょうど良いレベル（35%）（2）非常に難しい（1%）（3）やや難しい（22%）（4）やや簡単である（36%）（5）簡単すぎる（6%）であった。一方、コミュニケーション系の初級英語については、（1）ちょうど良いレベル（33%）（2）非常に難しい（4%）（3）やや難しい（25%）（4）やや簡単である（29%）（5）簡単すぎる（9%）であった。他府県出身者についても調査したが、今回は、新潟県内出身者の集計だけにとどめた。予測としては、他府県出身者の回答を含めてもこの数字は大きく変わらないだろうと思っている。今後の初級英語の企画に際して、参考にしていただければ幸いである。

## II. 英語（中・上級）

「中間報告」を受けて、初級英語の企画・実施責任が各学部に移ったのに対し、中・上級英語の企画・実施責任は英語学類が負うことになった。平成 13 年 7 月、大学教育開発研究センターに「全学向け上級英語改革特別検討委員会」が設置され、検討の結果、「中・上級英語」は以下に述べるようにその内容を一新することになった。新大における中級英語の歴史を振り返ると、平成 6 年の教養部改組の少し前までの長年にわたる英語 8 単位体制の時代は、「乙英語」として 2 年生にとって週 2 回必修であった。これは初級の「甲英語」を少し難しくしたものであり、内容はすべて担当者にまかされていた。続いて教養部改組の折りに、中級に「英語 IIA」・「英語 IIB」、さらに上級に「英語 III」が開講された。A はリーディング系、B はコミュニケーション系であった。平成 13 年度までこの形が続いたが、卒業要件単位から外れたこともあり、受講生もおしなべて少なく、開講コマも少なかった。レベルも、「乙英語」時代同様、初級英語を少し難しくしたものであり、A、B の区別にそっていけば、内容は担当者にまかせられていた。

平成 14 年度からの「改革・英語」では、新大生の英語力を格段に高めるべく、名称・内容ともにまった

く新しい「中・上級英語」が開講されることになった。その特徴は、（1）コマ数を多くして各 Semester 32 コマ開講する。（2）旭町の医歯系のクラスをのぞいて、学部指定なしで全学向けとする。（3）「中級一般目的英語」のリーディングとリスニングは定員 20 名だが、それ以外の全てのクラスは 15 名定員とし、全体として少人数教育を徹底している。（4）「読む」、「書く」、「話す」によって分けられたスキル別クラスを中心に開講し、同時に「主題別英語」では英語の総合力養成を目指している。（5）定員に余裕があれば一年次生の受講を歓迎している。（6）担当者はネイティブを中心に英語の運用に関心が高く経験も豊かなスタッフを起用している。

以下に「中・上級英語」の概要を示す。

### ＜中・上級英語のコース構成＞

<p>(1) 中級一般目的英語（中級 EGP）一期 16 コマ 2 年次生優先 （目的・内容）一般的、日常的な英語のコミュニケーション能力を伸張するための中級コースで、<u>英検 2 級から準一級レベル</u>。スキル別に 4 種類に分かれる。（EGP = English for General Purposes）</p>
<p>(2) 上級一般目的英語（上級 EGP）一期 8 コマ 3 年次生優先 （目的・内容）一般的、日常的な英語のコミュニケーション能力を伸張するための上級コースで、<u>英検準 1 級レベル</u>。スキル別に 4 種類に分かれる。</p>
<p>(3) 学問目的英語（EAP）一期 4 コマ 2, 3 年次生優先 （目的・内容）海外の大学・大学院などで学ぶ際に必要になる英語のスタディ・スキルを訓練するためのコースで、<u>英検 2 級から準 1 級レベル</u>。スキル別に 4 種類に分かれる。中・上級の区別はない。（EAP = English for Academic Purposes）</p>
<p>(4) 主題別英語（ETT）一期 4 コマ 2, 3 年次生優先 （目的・内容）英語を通じて、大学生にとって必要な特定主題をより深く学ぶためのコースで、<u>英検 2 級から準 1 級レベル</u>。スキル別ではなく、総合的な英語能力を高めることを目的にしている。中・上級の区別はない。平成 14 年度は「多文化理解」、「ドラマと映画」、「ディベート」、「公的英語検定」を開講する。（ETT = English for Topics and Themes）</p>

#### <中・上級英語についての注意事項>

1. 中・上級クラスはI期向けを、たとえば「中級 EGP スピーキング I」のように、II期向けを「中級 EGP スピーキング II」のように示すが、IとIIでレベルの違いはない。
2. I期向けのIと、II期向けのIIを別々に受講できる。単位は1 Semester 受講して1単位である。同じ名称の科目を複数回受講して単位を積み上げることも可能である。しかし、同一担当教員の同一名称科目を複数回受講して、単位を積み重ねるのは認められない（これについては、各学部で決めることであるが、英語学類としては「認めない」という考えである）。
3. 中・上級英語の単位を卒業要件単位に読み替えるか否かは、各学部の専決事項であるが、できる限り、そうした読み替え措置を講じていただきたいと考えている。
4. 中・上級英語の受講年次は、あくまでも「優先」の指定なので、1年次生や4年次生も（あるいは、上級 EGP の場合、2年次生も）、クラス定員に空きがあれば、受講が可能であり、むしろ奨励される。新大の一年生の中には、上の「I. 初級英語」の最後に示したアンケート結果からもわかるように、現状の初級英語を「簡単すぎる」と感じる学生が毎年少なからず見受けられる。英語圏からの帰国子女、留学経験のある学生、高校ですでに英検2級を取得している学生、留学や大学院進学をまぢかに控えている学生、英語力に特段の自信のある学生などは、一年次生であっても、四年次生であっても、中・上級英語にチャレンジしてほしい。一方、初級英語の単位を落とし、2、3年次になって、初級英語が学部の専門科目とバッティングするなどという理由だけで、中・上級英語の受講を希望するということは認められない。

今後、中・上級英語の内容をより良いものにして行くための課題をいくつか挙げておきたい。

- 内容の反省と点検を、少なくとも、年に一度は行い、4年に一度は科目の種類やコマ数の改善を検討する必要がある。平成14年度I期に関しては、たとえば、「主題別英語」（公的英語検定）には4月に受講希望者が定員をはるかに超えて押しかけ

たという事実がある。予想していたことではある。いまや TOEIC のスコアが社内人事に影響を与えることもある時代なのである。聴講希望者数だけですべてを決めるのは危険であるが、学生の受講動向も十分参考にしながら、今後のコース・デザインを考えて行く必要がある。

- 中・上級英語の企画・実施の責任は英語学類である。しかし、さらに継続的に実を上げるには、将来的に、「外国語としての英語教育」（Teaching English as a Foreign Language = TEFL、これは現在では独立した研究分野になっている）を専門にするコーオーディネーターを大教センターなどで、あらたに雇用する必要があるのではないかと考える。
- 各学部においても、中・上級英語の受講を奨励していただきたい。

#### III. 初修外国語

今回は「改革・英語教育」元年であるため、初修外国語についてのスペースが少なくなったことをお許し願いたい。初修外国語については、平成14年度も、大きな変化はない。初修外国語で顕著に実効を上げているコースとして、ドイツ語、フランス語、ロシア語が共同してI期のみ週1回開講している「言語文化基礎」と、各外国語の「集中コース」があるとされている。「集中コース」は週4回のもので週3回のものである。また中級の「集中コース」には週2回のものである。「集中コース」は、外国語の種類によって、日本人教員とネイティブの教員が組んで実施するものと、ネイティブの教員のみケースがある。「集中コース」がきわめて高い教育効果を発揮することが担当者から報告されている。平成14年度に向けても、通常の「初級」・「中級」、「言語文化基礎」、「集中コース」が従来どおり開講される。

なお、平成14年1月に、大学教育開発研究センターに「初修外国語教育改善特別検討委員会」が設置され、英語教育改革に続き、新大における初修外国語教育の改革を目指して鋭意検討を重ねていることも報告しておきたい。